

武蔵野日曜集会 聖霊降臨節

旧約の神霊と新約の聖霊

――創世記、イザヤ、ルカ、ロマほか――

1991年5月26日

小池辰雄

ルーアッハ 神の霊 無実実存 隠れたる福音 神霊の現象体 魂之霊 エホバの霊 絶対他
力 キリストを受けとるか、受けとらないか 肉というのは自己本位のこと

【創世記1】

2 地は定形なく曠空して黒暗淵の面にあり。神の霊水の面を覆たりき。3 神光あれと言いたまなければ光ありき。……27 神その像の如くに人を創造たまえり……

【出エジプト3】

1 モーセその妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧いおりしがその群を曠野の奥にみちびきて神の山ホレブに至るに、2 エホバの使者 棘の裏の火焰の中にて彼にあらわる。彼見るに棘火に燃ゆれどもその棘焼けず。3 モーセいいけるは我ゆきてこの大なる観を見、何故に棘の燃えたえざるかを見ん。4 エホバ彼がきたり観んとするを見たもう。即ち神 棘の中より、モーセよモーセよと彼を呼びたまひければ、我ここにありというに、5 神いいたまひけるは此に近よるなかれ、汝の足より履を脱ぐべし。汝が立つ処は聖き地なればなり。6 又いいたまひけるは、我はなんじの父の神アブラハムの神 イサクの神ヤコブの神なりと。モーセ神を見ることを畏れてその面を蔽せり。

【ヨブ33】

4 神の霊われを造り 全能者の氣息われを活かしむ。

【詩篇33】

6 もろもろの天はエホバのみことばによりて成り。天の万軍はエホバの口の氣によりてつくられたり。

【イザヤ6】

6 ここにかのセラビムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手になずさえて我にとびきたり、7 わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと。

【イザヤ11】



1 エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。²その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聰明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおおるるの霊なり。……⁴その口唇の氣息をもて悪人をころすべし。……⁹かくてわが聖山のいずこにても害うことなく傷ることなからん。そは水の海をおおることくエホバをしるの知識地にみつべければなり。

【イザヤ42】

1 わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。……⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらきそのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。

【イザヤ59】

21 エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊今よりのち永遠になんじの口より、なんじの裔の口より、汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり

【イザヤ60】

19 昼は日ふたたびなんじの光とならず月もまた輝きてなんじを照らさず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの栄えとなり給わん。²⁰なんじの日はふたたび落ちず、なんじの月はかくなることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり、汝のかなしみの日畢るべければなり。

【イザヤ61】

1 主エホバの霊われに臨めり、こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、²囚にゆるしをつけ、縛められたるものに解放をつけ、³エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、⁴灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえて歡喜のあぶらを予え、⁵うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。

【エレミヤ23】

9 預言者輩のために我心はわが衷に壞れわが骨は皆震う。且つエホバとその聖言のためにわれは酔える人のごとく酒に勝たるる人のごとし。

【エゼキエル1】

20 凡て霊のゆかんとする所には生物その霊のゆかんとする方に往く。輪またその傍らに上る。これ生物の靈輪の中にあればなり。



【エゼキエル11】

19 我かれらに唯一の心を与え、新しき霊を汝らの衷に賦けん。我かれらの身の中より石の心を取りさりて肉の心を与え、²⁰ 彼らをしてわが憲法に遵わしめ、吾律法を守りて之を行わしむべし。彼らはわが民となり我はかれらの神とならん。

【エゼキエル18】

31 汝等その行いし諸々の罪を棄て去り新しき心と新しき靈魂を起こすべし。

【ヨエル2】

12 然れどエホバ言いたもう、今にても汝ら断食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に帰れ。¹³ 汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし。彼は恩恵あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛憐大いにして災害をなすを悔いたもうなり。¹⁴ 誰か彼のあるいは立ち帰り悔いて祝福をその後にとめのこし汝らをして素祭と灌祭とをなんじらの神エホバにささげしめたまわじと知らんや。

【ルカ12】

49 我は火を地に投ぜんとて来れり。この火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰ されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思いせまること如何ばかりぞや。

【ロマ8】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。² キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。³ ……⁴ これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。⁵ 肉にしたがう者は肉の事をおもひ、霊にしたがう者は霊の事をおもう。⁶ 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。⁷ ……⁸ 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。⁹ もしキリスト汝らに在さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。

【コリント前2】

4 わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。⁵ これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。⁶ ……⁷ 録して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』とあるが如し。⁸ 然れど我らには神これを御霊によりて顯し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。⁹ それ人のことは己が中にある霊のほか



に誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほか知る者なし。
12 我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり、これわれらに神の賜いしものを知らんためなり。13 又われら之を語るに人の智慧の教うる言を用いず、御霊の教うる言を用う、即ち霊の事に霊の言を当つるなり。14 性来のままなる人は神の御霊のことは受けず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁べき者なるが故なり。15 されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるることなし。16 誰か主の心を知りて主を教うる者あらんや、然れど我らはキリストの心を有てり。

【コリント前3】

16 汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。17 人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。

【コリント前6】

17 主につく者は之と一つ霊となるなり。……19 汝らの身はその内にある、神より受けたる聖霊の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。20 汝らは価をもて買われたる者なり、然らばその身をもて神の栄光を顕せ。

【コリント前9】

16 われ福音を宣伝うとも誇るべき所なし、己むを得ざるなり。もし福音を宣伝えずば、我は禍害なるかな。……21 律法なき者には——われ神に向かい律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあれど——律法なき者の如くなれり、これ律法なき者を得んがためなり。22 弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んがためなり。我すべての人には凡ての人の状に従えり、これ如何にもして幾許かの人を救わんためなり。23 われ福音のために凡ての事をなす、これ我も共に福音に与らん為なり。

【コリント書6】

8 また光栄と恥辱と悪名と美名とによりて表す。我らは人を惑わす者の如くなれども真、9 人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、懲さるる者の如くなれども殺されず、10 憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。

【ピリピ4】

12 我……一切の秘訣を得たり。



●ルーアツハ

旧約聖書で「聖き霊」と書いてあるのは、ダビデの有名な詩篇51篇ですが、その他に多分一、二か所あったかと思えます。旧約では「聖霊」という熟語はないと言ってもいいようなわけです。「エホバの霊」はたくさん出てくる。「神霊」なんです。

「聖霊」という熟した言い方は、キリストの霊でありまして、キリストの十字架を通じて与えられた霊だけが「聖霊」です。だから、「聖霊」というのは特別な言葉であるわけです。「霊」という字は、ヘブライ語では「ルーアツハ」と言います。これは「魂」ではなくて、「霊」の方です。あるいは、これを「心」と訳してあるところもあるけれども、これは正に霊です。「ネフェシュ」という言葉が「魂」です。「霊」はドイツ語の「ガイスト」、英語の「スピリッツ」です。「魂」の方は、「ゼーレ」、「ソウル」です。

「ルーアツハ」はギリシア語では「プネウマ」です。「ルーアツハ」も「プネウマ」も両方とも「霊」という意味と、「息」「気」「氣息」という意味と、もう一つ大事なのは「風」という意味を持っています。だから、これを「風」と訳していいのか、「息」と訳していいのか、場所によっては迷うこともある。

「霊は風の如く、何処より来て何処へ行くか知らず」

とキリストが言われたでしょ。あれは、同じ字なわけですね。これは、ギリシア語もヘブライ語もこの三つの意味を持っている。これに「聖」「ハギオン」が付くと、

「ト プネウマ ハギオン」

というのは「聖霊」のこと。英語の「ホーリ スピリッツ」です。ヘブライ語では「ルーアツハ コーデーシュ」という字です。「カタルシス」という言葉もありますが、普通は「ハギオン」です。

「霊」は「火」にたとえられる。またある時は、「水」に例えられる。「水火相いれず」というが、これは「相いれて」いるんだ。火でもあり、水でもある。「天地正大の気」が、

「秀でては富士の嶽となり」

開いては万葉の桜となり

注いでは大瀬の水となり

凝っては百煉の鉄となる」

という。素晴らしいね、あの詩は。藤田東湖というのは非常に霊的な男だ。すべて神の気がこれを現象したものだという。とにかく、創世記から黙示録まで、全聖書は神の霊なしにはあり得ないところの本です。

●神の霊

では、旧約のいくつかの場所に当たっていきましょう。もう、一番先に出ている。創世記1章2節、



「²地は定形なく^{かたち}曠空^{むなしく}して^{やみ}黑暗淵^{わた}の面^{おもて}にあり。神の霊水の面^{おもて}を覆^{おおい}たりき。」(創世記1:2)

混沌たるところに「神の霊」「ルーアツハ・エロヒーム」だけがこれを覆っていた。そして、神の言葉は「霊言」である。

「神光あれと言いたまひければ光ありき」(創世記1:3)

という、力を持った言葉ですから。言が現象する。神の業、これも「霊業」、霊のわざです。霊を抜きにしては、何事も起きないわけです。だから、聖書はどこを読んだって、これに触れるわけだ。そういう、一番の根底をいい加減にして、それで、「この意味がどうだ」と意味ばかりを考えている。「意味」の世界じゃないんだ。「現実」の世界です。現実の世界だから、自分がその現実体にならないことには、聖書は読んだとは言えない。こちらが現象体にならないとね。

「¹モーセその妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧^かいおりしがその群を^{あらの}曠野の奥にみちびきて神の山ホレブに至るに、²エホバの使者^{つかい}棘^{しば}の裏^{なか}の火焰の中に彼にあらわる。彼見るに棘火に燃ゆれどもその棘焼けず。³モーセいいけるは我ゆきてこの大なる^{みもの}観を見、何故に棘の燃えたえざるかを見ん。⁴エホバ彼がきたり^み観んとするを見たもう。即ち神棘の中より、モーセよモーセよと彼を呼びたまひければ、我ここにありというに、⁵神いいたまひけるは此に近^こよるなかれ、汝の足より履^くを脱ぐべし。汝が立つ処は聖き地なればなり。⁶又いいたまひけるは、我はなんじの父の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりと。モーセ神を見ることを畏れてその面^{かお}を蔽^{かく}せり。」(出エジプト3:1-6)

これは、「霊火」の現象でもって出てきたわけです。そして、神さまのお告げがあつて、

「お前は、わが民をエジプトの半奴隷状態から救ってやれ」

「そんな事は私にはできません」

「私がお前と一緒にいるよ。心配するな」

「では、行きます。貴方は一体何という神さまですか、皆に聞かれたら何と言

つたらいいですか」

「我は有りて在らしむる者なり」

と。「我は有りて在らしむる者なり」という訳し方をするのは、私の他にいません。有ることがまわりを在らしめるのが本当の在り方、実力のある在り方です。

太陽が地球を在らしめている。地球は太陽に絶対依存している。地球は無力なんだ。地球は無力で、この生きとし生けるものは、大自然は全部太陽の恩恵によっている。このことだけでも本当に瞑想していれば、もう、信仰の世界に入ってしまう。地球となったのはキリストだから。神さまに絶対依存している。無力なんだ。何もできない。何も言えない。ちつ



とも善くない。だから、キリストは「無者」だ。絶対依存していると、太陽の力や恵みは全部、地球で発現している。

この地球というのは素晴らしい天体だ。それを人間が神さまから離れて、さんざん地球を害^{そこな}つてしまつて、21世紀にはどうかなつてしまうという。人間の神離反の現実がそういう事になって、いくら平和の会議をしたつてダメだよ、政治家が神さまに戻らない限り。

"Wir Deutschen fürchten Gott, sonst nichts in der Welt."

「我々ドイツ人は神を拜んで、恐いものは一つもない」

これはビスマルクの言葉です。さすがはビスマルクだ。それだけの政治家はいない。ビスマルク、リンカーン、グラッドストーン、あの次元の政治家は今はいないものな。ゴルバチョフも、もう一つ足りない。今、一番偉いのはゴルバチョフだけれども、もう一つ足りない。三大政治家の反対の、三大悪^{わる}がいる。ヒトラーとスターリンと今のフセイン、この三人は一番悪だ。ダンテの地獄のどん底に落とされる。

我々は本当に全身火の如くなつていなければ。ならざるを得ないですよ、聖霊が来たら。

「私の信仰なんて、そんな事は問題にしてません。私は聖霊に圧倒されて、あり難くてしょうがありません。何がどうなつたつていいですよ。いろいろな事が起きれば、逆に力が来ますよ」

とそういう人にならなくては。そういう現実です。本当ですよ。ありがたいね、本当に。

●無の実存

それで、モーセは、もの凄いエホバの神の霊の力でもって出エジプトをやった。モーセが手を挙げれば、紅海の水が二つに分かれてしまう。下げれば、それが塞がる。エジプトの大軍は皆溺れてしまう。大変な事だ。おとぎ話じゃないですよ。本当なんだ、これは。だから、いやもう、安閑として読めないです、聖書なんていうものは。

「参りました!」

と。「参りました」と本当に降参してごらん、力が来るから。皆、いい加減な降参の仕方をしている。魂の世界はゴマかしがきかないから、本ものが本当に来ているか、来ていないかは、何も人の説明は要らない。また、人にどう思われようと、そんなことにかまわない。

「とにかく、私はもう行きつくところまで来ました。私自身じゃない。圧倒されました」

と。私は何も偉くはない。私は平伏しているだけだ。平伏さないで、

「俺は霊的になった」

なんて言うのと、サタンになる。とんでもない。キリストは父なる神の前に本当に平伏した。「謙遜」なんてものじゃない。「謙遜」なんていう道徳的な範疇の言葉で表されない。ぶっ倒れの、平伏しの、分裂のない、全的な魂です。



「我思う」

なんてのはダメなんです、思ってたんじゃない。「我思う」なんてやると、行き詰まる。こないだ、H君が

「まだ私は、どうも、本当のところには……」

というから、

「あんたは考え過ぎるんだよ、簡単になれ。ヨハネ伝をじっくりと、その文字に即

して、投げ込んで読みなさい」

と言っておいた。他はいらないんだ。ヨハネ伝は一番霊的な福音書だから。

「もう、先生、ダメです」

なんて情けないことを言うから、

「ダメじゃない。本当にダメになれば、ダメでなくなるんだ」

と言ってやった。

何をやってても、本質的な意味では伝道になっていますからね。いつでもいいです、遅くはないから。本当にひっくり返れば、もう凄いことになるんだ、最後の瞬間でもね。一番先に天国に行ったのは、あの盗賊じゃないか。

「汝、今日我と共にパラダイスなり」

と。これが福音だから。

「もう自分はなかなかゼロになれません」

と。なれはしないよ。

「キリストがくださっているゼロをいただきなさい」

という話なんだ。

「十字架で、お前の過去も現在も未来も、相対的なものは全部私は贖ってしまった

から、何を心配するか」

と。それを本当に受けとれば、聖霊は必ず来る。力は来る。光が来る。これは、各個人が体験するよりか仕方がない。

無教会の人たちは気の毒だよ、

「私の信仰は、信仰は」

と言っている。信仰を私している。いつまでたつても始まらない。内村先生の召天三十年の時に私は『曠野の愛』誌(第33号1960年春季号)に書いたでしよ、

「無の実存」

と。これで無教会をアウフヘーベンした。尊敬するものは、もちろん相対的な意味で私は尊敬してますよ。人をけなしているのではない。先生方はそれぞれに役割を果たされた。しかし、そこに止まっていたらダメだ。だから、各召団はそれぞれの使命がある。数ではない、質の問題だ。それで進んで行く。



●隠れたる福音

それから、出エジプト記の19章のところで、シナイ山で、またこれが火の山となって、そこでもって十戒が与えられたでしょ。「十言」だ。このモーセの十戒のことは、さんざんお話したから、言いません。あれも

「隠れたる福音」

です。単なる「律法」じゃない。これはユダヤ人が「律法」にとつたのが間違い。キリスト自身もそれを律法的に仰っているけれども、それはユダヤ的伝統で仰っているんですよけれども、キリストはそのモーセの奥を言っておられる。

「汝殺すなかれ」

ではない。

「お前は殺人しない」

という、信頼している言葉です。

「お前たちは勉強する。故に試験はしない」

という、そういう学校になればいいわけだ。それで、意気に感激して勉強する。勉強しない奴は勉強する。

「勉強しないと、おこられる」

と、そんなことではない。すべてが信愛関係です。

もう日本の今の教育者は宗教心を奥に持たなければ——私立であろうと公立であろうと、そんな区別はない——本当の教育はできない。日本の教育にはもう期待ができない。だから、ご両親が、親が本当の教育を、薫育をしなければいかん。勉強のことは学校がしてくれるでしょうけれども、本当の勉強も学校でしてないようだな、だいたい。受験勉強じゃダメなんだ。本当の勉強とはそんなものじゃない。どんな人たちもみな特色があるんだから、その特色を生かすような専門学校がたくさんあって、

「ああ入れてやる、入れてやる」

と皆入れたらいい。中で鍛えればいい。試験なんか要らない。人数が少しあふれたって構わない。中で鍛えればいい。

「お前、この学校にいられないね、そんなことでは。出てもらおう」

というような学校になればいいんだ。そうしたら、自分の好きなことをやるんだからね、一生懸命やるよ、みんな。

私は詩の中でいろんな事を書くからね。もう本当に情けない。だから、一人ひとりが本当に福音の現象体となって身証していかざるを得ない。

●神霊の現象体

「神の霊われを造り 全能者の氣息^{いき}われを活かしむ」(ヨブ33・4)



この場合の「神の霊」は「ルーアツハ」で、「氣息」は「ネフェシユ」の方です。同じ事柄を別な言葉で表現しているときに、この場合の「氣息」はほとんど「霊」と同じような気持を持った言葉です。神の霊で自分たちはできている。我々は「神霊の現象体」です。

「神の相に即して男と女を造った」(創世記1・27)

とありました。この聖書の次元は自然科学と違。

「これは自然科学とどう調和するだろうか？」

なんて、調和なんかしませんよ、次元が違うんだから。調和させようと思って、いろいろ考えることは無駄な話です。

神の「無相の相」だ。お爺さんでも何でもない。無相の相なる霊神に即して造られているんだから、我々は元々霊的存在である。だから、「ひと」は「霊が止まる」と書いて

「^{ひと}霊止」

と書く。神の霊が止まっている^{ひと}霊止です。本来そうなんだ。それがダメになっちゃったから、キリストがそれをまたひっくり返して回復してくださった。

「お前は私の霊で^{ひと}霊止になった。聖霊を受けたから^{ひと}霊止になった」

と。聖霊を受けると本当の^{ひと}霊止になる。

「聖霊なき者はキリスト者に非ず」

とパウロが言っただけども、

「聖霊なき者は^{ひと}霊止に非ず」

という。「キリスト者に非ず」でなく、「^{ひと}霊止に非ず」、霊が止まっている者じゃないということなんです。

「⁶もろもろの天はエホバのみことばによりて成り。天の万軍はエホバの口の

気によりてつくられたり」(詩篇33・6)

この「口の気」の「気」というのは「ルーアツハ」という字です。

イザヤ書は大変なところだ。6章はイザヤが召命を受けたところで、羽が六つある天使が舞って、そして「聖なるかな」と言っている。

「⁶ここにかのセラビムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる^{あかきひ}熱炭を手にならず
さえて我にとびきたり、⁷わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの

唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと」

(イザヤ6・6～7)

聖霊の火は悪を滅ぼすし、それから、素晴らしいものを与える。火自身が二つの性格を持っている。火自身が審判の火、恵みの火なんです。

●魂之霊

「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。



²その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聰明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり」(イザヤ11・1〜2)

「謀略」という言葉はおかしい。「思慮」です。「才能」は「能力」。「知識」は「ソフィア」です。積みかけて、こんなに言っているところは他にない。まあ、大変なことが書いてある。そして6節からはもう天国だ。動物まで全部救われてしまつて、

「⁹かくてわが聖山のいずこにても害うことなく傷ることなからん。そは水の海をおおえるごとくエホバをしのの知識地にみつければなり」(イザヤ11・9)

と。こんな、現実しないような事を、預言者は遠慮なしに水を割らずに言う。いわゆる「ユートピア」とは違う。これは終末の神の国の預言ですから。黙示録に通ずる言葉です。黙示録はイザヤ書から随分来ているわけです。

「⁴その口唇の氣息をもて悪人をころすべし」(イザヤ11・4)

と書いてある。

「¹わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし」(イザヤ42・1)

まるでパウロみたいだな、これは。

「⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらきそのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う」(イザヤ42・5)

「神の息を吹き入れたから、生ける者となつた」

という、あの「息」と同じ字です、これは。「ルーアツハ」と「ネフェシユ」はよく組になつて使つてある。正に「靈魂」なんだ。私は「たましひ」を

「魂之霊」

と書くでしょ。これは大きな辞典に出ていた。

この42章は有名な「エホバの僕」の歌の最初の歌です。

「我わが霊をかれにあたえたり」

と。預言者は全部そうです。神の霊言でもつてものを言っている。だから、預言者たちの祈りは本当に神の中に、エホバの中に祈り入っている祈りから始まつているね、一人びとりが。単なる集団じゃない。

有名なイザヤ書53章には、この「霊」という字は出てこない。ここはキリストの碎かれる、あの「碎け」のところですよ。

「²¹エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊なんじの口におきたるわがことばは

今よりのち永遠になんじの口より、



なんじの裔すえの口より、汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。
わがかれらにたつる契約はこれなりと。

此はエホバのみことばなり」(イザヤ59・21)

「わが霊」と「わがことば」とある。「霊」と「言」が同義語に使つてある。この言はもちろん「霊言」です。だから、

「発する言は霊言だぞ、神さまの言葉だ」

ということ。人間の口から出る言葉は実にいろいろな、天国から地獄までいろんな言葉があるけれども、本来は神の言から告白されるものだ。

凄いが書いてあるね、これは黙示録と同じだ。

「19 昼は日ふたたびなんじの光とならず

月もまた輝きてなんじを照らさず、

エホバ永遠になんじの光となり、

なんじの神はなんじの栄えとなり給わん。

20 なんじの日はふたたび落ちず、

なんじの月はかくることなかるべし。

そはエホバ永遠になんじの光となり、

汝のかなしみの日おわ畢るべければなり。」(イザヤ60・19、20)

素晴らしいね。こういうことを断言しているからね、イザヤ書というのは。

「主エホバの霊あふらわれに臨めり、

こはエホバわれに膏あふらをそそぎて

貧しきものに福音をのべ伝うことをゆだね、

我をつかわして心の傷いためる者をいやし、

俘とらわれびと囚いましにゆるしをつげ、

縛められたるものに解放ときはずちをつげ、

2 エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、

又すべて哀かなしむものをなぐさめ、

3 灰にかえ冠かんしをたまいてシオンの中よろこびのかなしむ者にあたえ、

悲哀にかえてあた歡喜のあぶらを予え、

うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。

かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、

その栄光をあらわす者となえられん」(イザヤ61・1、3)

イザヤ書は全部、詩ですからね、特に文語は行を替えて書かなくてはいかん。

「9 預言者輩のために我心はわが衷うちに壊れわが骨は皆震う。

且つエホバとその聖言さきよきことばのために

われは酔える人のごとく酒に勝たるる人のごとし」(エレミヤ23・9)
「神さまの御言で私は酔ってしまつて、酒を飲んで酒に勝たれる人の如くなつてしまつて、どうにもならん」

と。エレミヤという預言者はおもしろい。

●エホバの霊

エゼキエルというのは、普通の学者には分からん。これは非常に霊的な預言者なんだ。

「20凡て霊のゆかんとする所には生物その霊のゆかんとする方に往く。輪また

その傍らに上がる。これ生物の霊輪の中にあればなり」(エゼキエル1・20)

生き物の霊まで言っている。彼自身が、霊が身体から出て行つてしまつて、いろんなものを示されたりする。37章の「枯骨の復活」がそうです。エゼキエルという預言者は、そういう意味に於て、霊的な預言者です。

「19我かれらに唯一の心を与え、新しき霊を汝らの衷に賦けん。我かれらの身の中より石の心を取りさりて肉の心を与え、20彼らをしてわが憲法に遵わしめ、吾律法を守りて之を行わしむべし。彼らはわが民となり我はかれらの神とならん」(エゼキエル11・19～20)

「肉の心」の「肉」というのは暖かい愛の心のことです。肉情の肉ではない。

「彼らはわが民となり我はかれらの神とならん」

という言い方はよく出てくる。エレミヤにも出てくる。「新しき霊」とあるでしょ。「唯一の心」がこの「霊」に通ずる。別の角度から言っているだけの話です。18章にも「新しき心」と「新しき靈魂」というのが出ている。

「31汝等その行いし諸々の罪を棄て去り新しき心と新しき靈魂を起こすべし」
(エゼキエル18・31)

「靈魂」と訳されているところは、よく「ネフェシユ」である場合があるが、これは原文を見ないとよく分かりませんけれども。要するに、旧約では「エホバの霊」です。これがすべて支配して動いている世界で、これに逆らう者は滅ぼされる。それで一貫しているわけです。

「12然れどエホバ言いたもう、今にても汝ら断食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に帰れ。13汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし。彼は恩恵あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛憐大いにして災害をなすを悔いたもうなり。14誰か彼のあるいは立ち帰り悔いて祝福をその後にとめのこし汝らをして素祭と灌祭とをなんじらの神エホバにささげしめたまわじと知らんや」(ヨエル2・12～14)

「彼のあるいは立ち帰り」とは、



「神さまがあるいは向きを変えて」

ということです。こつちの方へ向きを変えてくださって、そして恵みをくださる。神さまの方からやって来る。とにかく、平伏して入らなければいかん。心を尽くして、「衣を裂かずして心を裂いて」と。

「プロウクンハートで行け」

と言う。これは相対的にはできても、絶対的にはできない。その世界を全部下さっているのが、このキリストの本願の十字架なんです。

●絶対他力

そういう絶対他力の凄いことを言っているのが一遍上人です。親鸞も凄いが、親鸞をも一つ上回っているのが一遍なんだ。

「南無阿弥陀仏という、あの言葉を称名することは大事だけれども、南無阿弥陀仏というその六字が主体となつて、南無阿弥陀仏が南無阿弥陀仏している。だから、お前たちはそれでもつて既にもう救われているんだ」

と。ちょうど、

「十字架で救われているんだ」

ということと同じようなことを、この一遍というのは言っている。大変な奴だね、一遍は一番徹底している。

「こつち側の何かではないぞ、ただその事に気がつけ」

というわけだ。気がついて、

「そうでしたか、それは有難い、無条件ですね」

と。そうすると阿弥陀さんの力がやってくる。よく分かる。十字架が無条件に救ってくださったから。それで、

「有り難うございます!」

と言って、もう自分なんか問題にしない。

「自分の一切を問題にしません」

と平伏す。そこに聖霊は臨まざるを得ない。

皆さんは今、私は語りながら、あなた方は聞きながら、本当にその現実に入っていないければつまらんですよ。「そうですか」じゃない、

「はい、そうです。その通りです!」

と受けとる。事実が救うんで、お釈迦さんが本当に悟ったその瞬間に救いはある。

「救いは既に、恵みは、慈悲は、でき上がっている。そのことに気がつけ」

と言うだけだ、一遍は。だから私も、

「十字架で救われていることに気がつきなさい」



と言う。「私は行きますから、お願いします」じゃない。

「ぶつ倒れたらキリストの腕の中だった」

という世界だ。これは本当にその現実は凄い。

「帰れ、帰れと言つても、帰れません」

と言つてぶつ倒れてください。そうしたら、向こうからやつてくるから。

「あなた、やつて来てください、私は帰れません」

というようなことをエレミヤが言っている。

「おかあちゃん、もう歩けないよ、来ておくれよ」

という、小さな子供が泣いて倒れているのと同じことだ。おかあちゃんはやつて来る。

ゲーテがスピノザに非常に感激したのは、あの「没我」的境地なんです。

「自分なんか問題じゃない」

と。むしろゲーテみたいなのが、本当はキリストがつかめている人なんです。ゲーテという人はいろんな面を持っていますけれども。大変な天才だから。

私は今度の『エン・クリスト特別号』（1991年5月刊）に読みたいなものを書きました。19頁に、

「汝は第三の罪びとの首である」と大地の霊が

私に囁いた。聖霊が然り、然らずと執り成し給う、

キリストこそは十字架で「罪びとの首」と成り給うた。

パウロは、内村鑑三は、自分を「罪びとの首」だと言った。ところがどっこい、キリストがどん底に、罪びとの首になった。

大詩人ダンテ、ゲーテは高嶺の花だが、

昼は陽光を貰くキリストの霊光を浴び、

夜は星影に映ゆる聖霊の愛に浸り、

ダンテやゲーテにはかないませんよ。私の詩の道はこの二つ、キリストの光と聖霊の愛。

詩の旅を旅路の果てまで私は歩む

「山路越えて独り往けど」の讚美歌を唱いつつ。」

これは本当に私の告白です。それでもう、示されたことは何でも書くから。もうやりきれんです、福音が凄くて。

●キリストを受けとるか、受けとらないか

では、新約に入ります。この新約聖書というのは本当に無駄がない。大変なものです、これは。完全に聖霊の力で書かせられているから。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、これはキリストの現実だからね、何といったって。「解釈」じゃないんだ。「解釈学」なんて下らないものがあるけれども。私はもう言うのが嫌になつてしまふんだよね、正直。



では、著しいところから行きましょうか。コリント前書2章、

「⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。⁵これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。……⁹録して『神のおのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』とあるが如し。¹⁰然れど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。¹¹それ人のことは己が中にある霊のほか誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほか知る者なし。¹²我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出づる霊なり、これわれらに神の賜いしものを知らんためなり。¹³又われら之を語るに人の智慧の教うる言を用いず、御霊の教うる言を用う、即ち霊の事に霊の言を当つるなり。¹⁴性来のままなる人は神の御霊のことを受けず、彼には愚かなる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁べき者なるが故なり。¹⁵されど霊に属する者は、すべての事をわきまう、而して己は人に弁えらるることなし。¹⁶誰か主の心を知りて主を教うる者あらんや、然れど我らはキリストの心を有てり。」(コリント前書2:4-16)

御霊の言は世の人には分からんという。だから、伝道は本当に難しい。いわゆる説明して分かって、そんなことで分かって何になるか、という世界だからね。

「分かる、分からない」

じゃない。

「受けとるか、受けとらないか」

だ。キリストを受けとるか、受けとらないか。そこにかかっている。コリント前書2章のところには御霊のことが非常によく書いてある。

そのかわり、御霊が来たら、それでもって、いろんなキリストがなさった事、仰ったことが、福音書が全部読めてくる。聖霊がなければ読めない。

「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。

¹⁷人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも

亦かくの如し。」(コリント前3:16-17)

そのように聖徒にされているじゃないかと、断定してものを言っている。パウロの畳みかけているこの言葉は全部、止むにやまれずして発している言葉ですよ。頭でもって築きあげた論理と違うんです。

「¹⁷主につく者は之と一つ霊となるなり。……¹⁹汝らの身はその内にある、神より受けたる聖霊の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。²⁰汝らは価をもて買われたる者なり、然らばその身をもて神の栄光を顕せ。」(コリン



ト前6・17(20)

「汝らは価をもて買われたる者なり」とは十字架のことです。パウロは自分でそれを体現しているから、こういうことを断定的に言えるんです。こういう福音はもう伝えざるを得ない。

「16 われ福音を宣伝^{のべつた}うとも誇るべき所なし、已む^やを得ざるなり。もし福音を宣伝えずば、我は禍害^{わざわい}なるかな。」(コリント前9・16)

止むにやまれずして語っている。語らざるを得ないんだ、行わざるを得ないんだと。全部それです。だから、楽しい。そして、そのためにはパウロはもう自由自在だ。

「21 律法なき者には——われ神に向かい律法なきにあらず、反^{かえ}つてキリストの律法の下にあれど——律法なき者の如くなれり、これ律法なき者を得んがためなり。22 弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んがためなり。我すべての人には凡ての人の状^{さま}に従えり、これ如何にもして幾許^{いくばく}かの人を救わんためなり。23 われ福音のために凡ての事をなす、これ我も共に福音に与^{あずか}らん為なり。」(コリント前9・21(23))

その人の現実に関心を入れて、その人の境地に関心を入れて、そこからグーッと、キリストの力、生命、光、愛をそこに注ぎ込む。そのためには——上から臨むのではないんだ——そこに下りていって、それを救い上げてしまう。正に「救い上げる」という言葉がある。それが

「一切の秘訣を得たり」

ということですよ。

サマリヤの女に水をもらう時のキリストがそれなんです、

「水をおくれよ」

「あなたはユダヤ人なのに、サマリヤ人に水をくれとは何事か」

とあの女が言ったけれども。

「私がお前にやる水をもしお前が飲めばもう渇かなくなる」

「どこからそんな水を持ってきたか」

なんて聞いた。聖霊のことだよな。水に譬えた。それで、びっくりしてしまって、

「これは預言者だ、みんな来てみる」

と、水汲むのも忘れてしまって。あれが、正にパウロが言う、これなんです。相手の境地に入って、それを今度は、その人が驚くようなことを段々展開していく。パウロがピリピ書で、

「我、一切の秘訣を得たり」(ピリピ4・12)

というのはそのことなんです。

「8 また光榮と恥辱^{はたずかしめ あしきことえ よめなきことえ}と悪名と美名とによりて表す。我らは人を惑わす者の如くなれども真^{まこと}、9 人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとす



る者の如くなれども、視よ、生ける者、懲^{こら}さるる者の如くなれども殺されず、
10 憂^{うれ}うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富
ませ、何も有^もたぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」(コリント後6:8、
10)

無一物無尽蔵でござる、というわけです。これは皆、聖霊の豊かさです。

ロマ書8章は聖霊の讃歌と言っている。ロマ書7章は、

「ああ我れ悩める人なるかな」

という地獄だ。地獄と天国だ。生まれつきの私はこんなものだと言っている。

「ああ我れ悩める人なるかな。俺だって人間、弱き者だ」

と、パウロは決して人間ばなれしていない。ところが、8章にいくと、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キ
リスト・イエスに在る生命^{いのち}の御霊^{みたま}の法は、なんじを罪と死との法より解放^{とききはな}
たればなり。」(ロマ8:1、2)

「に在る」ですよ、「によって」「じゃない、

「キリスト・イエスの中にいる者は」

です。我々はもう、そういった罪と死の法則から解放放されて、キリストに在るところの
生命の聖霊の法でもって生かされる。

「法」というと、何か堅苦しいように思うけれども、そうじゃないです、この「法」とい
うのは。「水は低きに流れ去る」という自然現象なんだ。仏教の方でいう、「ダルマ」とか「ダ
ンマ」とかいう世界です。力を持っているんです、この法は。霊法だから。ひとつも奇蹟じゃ
ない。奇蹟はありません、みんな霊法の現れです。

「奇蹟は信仰の寵児だ」

とゲーテが『ファウスト』の中で書いているけれども、あれはまだそれ以前の表現でね、
奇蹟なんかない。「ワンダフル」だと思ふのは、こっちがそういう世界を知らないから、「ワ
ンダフル」に思ふんですけれど、「ワンダフル」じゃないんだ。霊法は「天的必然」。天的な必
然が本当の自由です。

ルターの『クリスチャンの自由』という本は素晴らしいけれども、本当は、なおあれは
まだ言葉が足りない。『ロマ書序文』の方が『クリスチャンの自由』よりも霊的には上の本
です。『クリスチャンの自由』はもちろん素晴らしい本ですけども。相手がルターであろ
うが、ゲーテであろうが、何であろうが、この聖霊の世界は全部キリストの光でつかめます。
凄^{すご}いんだから、これは。

●肉というのは自己本位のこと

「⁴これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完^まうせられん為^{ため}な



り。⁵肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。」
(ロマ8:4-5)

「肉」というのは、「自己本位」のことですよ。自己本位はどんなに立派そうに見えても、全部これは「肉」という。どんなに下らない詰まらない事に見えても、「神・キリスト本位」のものを「霊」という。本当の「霊的」というのはそういうことです。栄光を神に帰する魂は「霊」で、己の名誉だとか何とかを求めているものは「肉」です。

⁶肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。」(ロマ8:6)
これが平安、本当の生命です。

⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。
キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」(ロマ8:9)

「キリストの御霊なき者は本当の霊止にあらず」と言いたい。さつき言った通り。霊が止まる霊止です。

¹⁰もしキリスト汝らに在さば^{いま}体は罪によりて死にたる者なれど^{からだ}霊は義によりて生命に在らん。」(ロマ8:10)

これはかなり分析的にものを言っている。霊肉渾然^{こんぜん}として救われるのが本当の救いだから。

「血気の体あり、霊の体あり」

とパウロはまたコリント前書15章で言っている通りです。簡単になつてくださいよ。十字架・聖霊です。

パウロも始めは自分の熱心でやったけれども、そんな熱心はダメだ、神・キリストの熱心が入ってこなければダメなんだと。ロマ書9、10章の所にも書いてあるね。いわゆる熱心とは、いわゆる「信仰」で自分の側でえらく熱心な、

「あの人は熱心な人だ」

なんていう、人間的に熱心じゃダメだよ。くたびれちゃうよ、それでは。

もう、パウロは賛嘆してものを言っているね。だから、新約聖書は楽しい。どの言葉も手離しではできない。ところが、聖霊が入ってくると、みんなこれが可能となる。不可能なことが可能になってしまう。だから、福音なんだよな。誰がキリストの言葉に及第できるかというんだ。

「私に來なさい。そうしたら、この烈しい言葉が力になるよ」

と。それで、ルカ伝12章49、50節が本当に鍵の言葉なんだ。

⁴⁹我は火を地に投ぜんとて^{きた}来れり。この火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。」(ルカ12:49)

聖霊を地に投ぜんとして来たと。この聖霊の火があなた方に灯ったら、これはそこらの燈台の火と違って、どんな嵐にも決して消えない。人生のどんな嵐にぶつかっても消えない。消えないどころか、この火は盛んに燃える。いろんな事にでつくわせば、逆にこの火が燃



えるようなことになったら、その人は本ものですよ。いいですか。「自分の信仰」が分かりますよ、いろんな事にでつくわしてね、ガタガタするようじゃダメなんだ。

「ああ結構でございます、何でも来なさい。私は聖霊の力が逆に加わってきましたから、有難いはなしです」

と。人はみんな失望したり、落胆したり、ヘタすると自殺しそうになるような事に対して、「どつこい」というわけだ。全然行き詰まらない霊止^{ひと}になる。だから、

「この火燃えたらんには何をか望まん。これだけは大事だ、一番大事なのは聖霊なんだ」

「⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思いせ

まること如何ばかりぞや」(ルカ12・50)

「それを与える前に受くべきバプテスマがあるんだ」

とは十字架のことです。このキリストの言葉が本当に鍵なんです。だから、

「十字架を通つたらお前たちにこの聖霊の火を与えるぞ。これが順序なんだ」

と。キリストは地上にあつては、弟子たちには聖霊を与えなかった。贖罪をやつてないから。

「贖罪をやつて、お前たちが十字架を受けとつたら、もう聖霊は、塞^{ふさ}ごうとしたつて、

お前たちを圧倒せざるを得ないぞ」

と。そんなことは、私は無教会ではひとつも聞かなかった。内村鑑三、藤井武、塚本虎二はルカ伝のこの大事な言葉に気がついてない。意味としては書くでしょう。意味じゃないんだよ。これなりと。ルカ伝で一番大事な言葉はここだ。あるいは、福音書の一番大事なところだと言つてもいいくらいだ。

吉田松陰の言葉に、

「自非読万卷書 安得成千秋人」

(万卷の書を読むに非ざるよりは、いずくんぞ千秋の人と成るを得んや)

とある。万卷の書を読まなければいつまでも残るような人にはなれないぞと。しかし、万卷の書中の書は聖書ですから。万卷の書は読まなくても聖書を一万回も読む。何回でもいいんだ。聖書をまるで自分が聖書を暗記しているように知っている。そうしたらば、万卷の書以上のものがそこに展開してくる。それは大変なものです。

「聖書は万卷の書中の書」

だから。これはゲーテの言葉だ。ゲーテは聖書を本当に身読した。それが文学の中に溶けている。それだけの大文豪はまだ日本にいない。フランスのビクトル・ユゴー、ドストエフスキー、トルストイ、みんな聖書が土台です。パウロは特に聖霊の器です。

「我は罪びとの首」

と言ったのが、最大の使徒となった。では、午前の集会を終わります。

